

週刊センターニュース No.232



第232号(2008年11月4日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

○●○共同学習会のご案内 ○●○

※いずれも、通常の開催曜日と異なっていますので、ご注意ください。

第204回

日時: 11月11日(火) 午後4時30分～午後6時

会場: 角間キャンパス総合教育1号館2階大会議室

テーマ: 「今年度の大学社会生活論(環境論)を振り返る」

報告者: 西山宣昭(大学教育開発・支援センター)

趣旨: 今年度の大学・社会生活論では、金沢市環境局の職員の方々に金沢市の環境に関する取組について講義をお願いするなど、昨年度から授業内容を変更して実施された。ご担当いただいた金沢市の職員の方々も交えて担当教員の間で今年度の授業を振り返り、授業内容のさらなる改善に向けて意見交換を行う。大学・社会生活論の授業項目として環境論を選択する意義をご理解いただくため各学類の教務担当教員をはじめ多くの方々の参加をお願いしたい。

第205回

日時: 11月18日(火) 午後4時30分～午後6時

会場: 角間キャンパス総合教育1号館1階小会議室

テーマ: 「キャリアカウンセリングの実状」

報告者: 安藤ゆかり(株式会社パソナキャリア 大阪支店)

○●○各大学における卒業生の質を保証するシステム ○●○

大学生が身に付ける学習成果の明確化ということが、近年の高等教育言説において重要な一つとなっているが、これに関係して、卒業生の質をどのように保証するか、という点に着目して、特色ある他の国立大学の取組みについて少し触れてみたい。

最初の事例は、山口大学であるが、比較的よく知られているものに、TOEICを活用した英語教育がある。卒業要件として全学的にTOEICの認定基準を定めており、この基準を達成しない限り、卒業ができない仕組みをとっている。これは大学の教育成果を外部に示すための材料として、平成14年度に上記の英語教育カリキュラムが全学的に導入された。入学した学生は一律に「TOEIC準備」(必修科目)を前期クォーターにおいて履修した後、6月上旬のTOEICを受験する。そのテスト結果により基礎レベル科目、ないし当該科目の単位認定がなされ応用科目の履修ができる(『平成16年度「特色ある大学教育支援プログラム」TOEICを活用した英語カリキュラム 教育の水準保証と学習支援』、1-14頁、2008年3月)。また、学部・学科ごとに認定基準点は異なっているようであるが、この基準に到達できず、留年せざるをえない学生も少なからず出ている。

これ以外に、山口大学では、養成しようとする人材像を具体的に示し、実際に効果を上げているどうかを検証する努力を続けている。具体的には、グラデュエーション・ポリシー(卒業生が備えるべ

き資質を記したものの、以下 GP)、カリキュラム・マップ、WEB シラバスを作成し、それを学外に公開して、大学全体のカリキュラム、各科目、個々の授業の結びつきを明らかにしている。着手は 17 年度で、設置基準上の人材養成およびその他教育研究上の目的の学則化の指示以前である。教養教育の GP は大学教育センターを中心に作成され、以降改革の検討と実施という流れになっている。また、各学部・学科・コースごとにそれが設定されている（山口大学大学教育機構論集『大学教育』3 号、沖裕貴・田中均「山口大学におけるグラデュエーション・ポリシーとアドミッション・ポリシー策定の基本的な考え方について」39-55 頁、2006 年）。

課題としては、教養教育の最低限必要なものは共通教育でカバーできるものと学内で考えられたことから、学部・学科等の GP とそれが切り離された形になったこと、カリキュラム・マップをみていくと、GP の面から科目の過不足があること、到達目標を設定したことで、最低限のみを目指し、高いレベルを達成するインセンティブが働かなくなる危険があることなどが挙がっている。有機的関係を築いていくために、例えばマップの利用の仕方、シラバスのチェックについては、センターが出張 FD を行ってサポートしているということである。

2 つめの事例として、三重大学を取り上げる。この大学では、中期目標中の教育に関する目標として、4 つの力を育てることを掲げている。その 4 つの力とは、「感じる力」「考える力」「コミュニケーション力」「生きる力」であるが、その達成度を測定するために（ただし最後の力は「身につけたいか」「身に付くと思うか」の 2 項目のみ）平成 17 年度からアンケート調査（高等教育創造開発センターが実施）を行っている。入学時の紙ベースのものと 1 年から 4 年までの秋の Web によるアンケートに基づき、全学生を対象とするパネル調査で（学籍番号記入のため、経年調査が可能）ある。こうした取組みを進めることで、4 年間で学生自身が成長したことを目に見える形で確認し、自信をもって卒業させる仕組みをつくろうという狙いがあることは指摘するまでもないと思われる。Web の場合は即時に学生にフィードバックされて、学生からは肯定的な感触を得ているようである（三重大学高等教育創造開発センター HP (<http://www.hedc.mie-u.ac.jp/>) の「4 つの力アンケートに関する案内ページ」より、「4 つの力に関するアンケート調査についての説明～平成 19 年度実施の自由記述から～」)。またこの評価結果は、各部局の教務委員にデータが示され、その分析結果に基づいて各部局での対応や（教育）改善の方針などについて提案を求めているが、各学部からはあくまで補足的なものとして受け取られている。シラバスに関わっては、教育目標との関連で 4 つのうちどの力を（重視して）伸ばさせるかを%で記入させ、教育目標と実際の授業との対応を図っている。

GPA 制度については、教務情報システムに自動算出し、学生ごとに出力する機能をもたせているものの、学生の評価に用いているのは、工学部の 2 学科のみで、全学的に導入・活用するまでには至っていないようである。

卒業認定は、各学部規定で定められた修業年限と単位修得（医学部医学科は卒業試験が課され、他の全ての学部は卒業論文がある）にもとづいてなされるが、先の修学達成度評価が卒業判定に直接結びついていないわけではない。卒業生の質の保証とのリンクは今後の課題とされ、現段階では、こうしたシステムと直結した授業設計を計画しているところである。（文責：評価システム研究部門 渡辺達雄）

〇●〇 新着図書・資料の紹介 〇●〇

大学教育開発・支援センター図書室（総合教育棟南棟 6 階 613 号室）に、以下の図書が入りました。他の図書・資料と併せ、ご活用いただけると幸いです。

- ・ ベストプロフェッサー／ケン・ベイン、高橋靖直訳、東信堂、2008 年

優れた大学教師はどのような教え方をしているのか。様々なデータソースにもとづく調査から選び出した 63 人の大学教師の授業の進め方、学生への接し方を分析し、学生のやる気を起こし、効果的な学習環境を作るための方法を探ったもの。アメリカの高等教育関係図書のベストセラーの 1 冊に挙げられる。